

DOLL

上村陽子

「まあ、日本人形みたいな可愛らしいお嬢ちゃんですこと、」

前髪を眉の上で真一文字に切り揃えた、人より濃い私のおかっぱ頭を撫でながら、客人たちは笑いかけた。少し照れてはにかんだような表情をつくりながら、私も強ばった頬を少しずつ和らげた。この大人の見える透いたお世辞が、まだ小さい私の胸にどんなに心地よく響いたことか。

お人形さんのように可愛い、人形のように可憐であることが、少女時代の娘にとっ

て、どれほど素晴らしい憧れであるだろうか。

青い目の人形。私の憧れは、断然、西洋人形だった。金髪の巻き毛、雪のように白い肌、桜ん坊のような唇……こんな言葉が男の口から飛び出したら、何とも気障で、耳を覆いたくなるが、これらの形容どおりなのが人形なのだ。少女たちが、羨望の目で眺めるのも、無理はないだろう。

あつという間に、少女たちは、自分自身を目の前の人形そっくりの少女に仕立てあ

げてしまう。少女の空想は際限なく広がっていく。そう、私は、高い塔に閉じ込めら

れたお姫様。誰か助けて。悲しい身の上のお姫様にされた人形は、少女作詩作曲の淋しさを訴える歌を、切切と歌いあげる。また、ある時は、継母や我儘な姉に苛められる心の優しい女の子かもしれないし、悪い魔女に呪いをかけられて、深い深い森の中に眠り続ける眠り姫かもしれない。

しかし、御安心あれ。少女の物語の中には、その不幸な女性を救うべく、白馬に跨

った、凜凜しい王子様が登場する。人形は、忽ち、王子様に恋い焦がれる。咲き誇る薔薇のような幸せな乙女になる。

毎日のように、最後はいつも人形に白いウェディングドレスを着せて、私の人形遊びはおしまになるのだった。あの頃の私は、清純、無垢な花嫁衣裳を着る日を夢に見て、将来何になりたいかと問われれば、即座にお嫁さんなどと答える女の子だったのかしら、とふと苦笑が浮かんでくる。

今の女の子たちも、私のしたような人形遊び、しているのだろうか。マスコミの影響が多大な日々、と言うより、マスコミに翻弄されているような毎日、整形美人としか言いようのない人形が氾濫し、最近に至っては、歌手や漫画の主人公の人形ものさばっている。さらに、私にとって、言葉を喋る人形や、歩く人形なんて、愚の骨頂であり、無抵抗の人形に余計な手を加えた人間に対して、舌を出してやりたいくらい

だ。全く、なんでそんな小細工を施すのか、さっぱり判らない。こういう現在の環境を思うと、今の女の子たち、少し気の毒な気がする。

少し話がそれてしまったが、それにしても私の持っている人形たち、長い月日、何の不平も言わず、私の命じたとおりの役をこなしてくれた。

生まれてはじめて自分のものとなった人形。いつも和服姿の伯母から貰った、頬や手足のふっくらした人形。待ちに待った誕生日、両親にはやくからねだって、やっと手にした、姉妹の人形。どれも捨て難く、まだちゃんと我家に暮している。

不思議なもので、それらの人形とは、気を許した恋人のように真直ぐ向き合っただけでとても落ち着く気がする。肌の一部になっってしまったような気安さがある。最近、洒落た店のショウウィンドウに、アンティックなフランス人形が、所狭しと飾ら

れていたりするが、彼女たちとはそうはいかない。

「はじめまして。御機嫌いかが？」

「ええ、どうも有難う。今日は良いお天気、で何よりですわ」

お互いの心が計り知れず、警戒しながら、そんな他人行儀な挨拶を繰り返すだけ。確かに、あなたたちはとても素敵だけど。

私は、言葉をつまらせてしまうのである。

もう、何年も前から、人形を人から戴いたり、買ったたりすることもない。二十歳をとうに過ぎた私が、毎日人形を相手に遊んでいるとしたら、薄気味悪いだろう。ごくたまに、ふと顔を見たくなくなるくらいのものだから、御心配なく。

只、させられたままの姿勢をとり続け、何の抵抗もせず、顔色一つ変えず、嫌な表情など決して見せないで、私と向き合ってくれる人形を、無性にいじらしくいとしく思うのだ。
(ゆかり文化幼稚園)